

仏陀最後の旅と筏の譬

吉 元 信 行

一 仏陀最後の旅路との出会い

大聖釈尊（仏陀）の足跡を辿ること、それは仏教徒である限り、いつの時代も夢であり、悲願であった。今から二十年ほど前のこと、筆者は学友たちと始めてのインド仏跡参拝の機会に恵まれた。日時も限られ、仏教の聖地を最短距離で結んで駆けめぐるといふあわただしい旅であった^①。そのとき筆者は、実際の経典の記述にあわせて、仏陀の歩まれたとおりに、ゆつくりとその足跡を辿りたいとものだとつくづく思った。ことに、原始仏典の中でも、仏陀の行動が最もリアルに描かれている『大パリニツバーナ経』における足跡をどうしても辿ってみたいという思いが募った。そこには、仏陀がその最晩年に、王舎城から最後の旅を続け、その途中のクシナガラで入滅されるまでの行動と思想がありありと描かれている。その仏陀の生き様が読むものに深い感動を与える経典である。

それから二年後に、この願いが叶えられることになった。筆者はこの経典を手にして、最後の旅の出発点である王舎城の靈鷲山に立ち、そこから入滅の地クシナガラまでのルートを進むことができたのである^②。ことに、パトナのガンジス河岸「バーンズ・ガート」に立って見たガンジスの流れは感動的であった。というのは、仏陀はこのバーンズ・ガートあたりでガンジス河を対岸に渡られたはずであるからである。その流れは広大であり、広い中州のはるか

向こうに、かすかに見える対岸の木々が陽炎に揺らめいている。

ちょうどそのとき、目の前の河面を数多くの竹を組んだ大きな筏が流れていったのにはびっくりした。その上では数人の男たちがあわただしく漕いでいた。③というのは、最後の旅の様子を伝える『大パリニツバーナ経』によると、仏陀は仏弟子たちとともに一瞬のうちに対岸に渡られ、筏などを組んで苦勞して渡ろうとしている者たちを見て、有名な「筏の譬」という感興の言葉（ウダーナ）を唱えられたという。以下検討するように、仏陀が一瞬のうちに対岸に立たれたというのは実に不思議であり、また、この「筏の譬」は様々な謎に満ちた偈である。周知の如く、仏伝などにおいて、そこに摩訶不思議な物語が語られておれば、それが不思議であればあるほど、そこには重要な意味が象徴的に秘められていることが多い。この「筏の譬」をめぐる不思議な謎には、いったい何が秘められているのであろうか。幸いに、この『大パリニツバーナ経』には、パリリ原典の他、梵・藏・漢にわたる多数の異本・異訳が伝えられている。それらの比較対照によって、少しでもその謎の解明に迫ろうとするのが小論の目的である。

その後何回か筆者はこの最後の旅路のルートを辿ったが、折良く今年の夏（一九九七年）も、大谷大学の開講授業「インドの宗教と文化」の担当者として、インド仏跡の現地研修で学生を引率して同じルートを辿ることができた。最近完成した全長八キロにも及ぶパトナ大橋を通過して河を渡り（以前はフェリーで待ち時間を含めておよそ二時間ほどかけて渡った）、橋の上から滔々と濁流の流れる雨期のガンジスを眺め、遙か古に思いを馳せることができたのである。

なお、煩瑣を避けるため、以下本稿で使用する「筏の譬」に関する主要資料の略号と該当箇所を示しておく。

<MPSP> パーリ本『大パリニツバーナ経』・Mahāparinibbānasuttanta (D. No. 16) D II 89, 5-28.*

<SV> パーリ本註釈・Sumaṅgalavilāsinī II 542, 18-30.

<SV↓> パーリ本複註・Dīghanikāyaīthakathāīrkā II 179, 15-29.

〈MPs_s〉 サンスクリット本・Mahāparinirvāṇasūtra (Das Mahāparinirvāṇasūtra. Text in Sanskrit und Tibetisch, verglichen mit dem Pāli nebst einer Übersetzung der chinesischen Entsprechung im Vinaya der Mūlasarvāstivādin, auf Grund von Turfan-Handschriften herausgegeben und bearbeitet von Ernst Waldschmidt, Kyoto: Rinsen Book Co., 1986) pp. 158-160.

〈遊行〉 漢訳：遊行経 (『長阿含経』第二経 大正 No. 1) (大1・111b~113a)

〈般泥〉 漢訳：般泥洹経 (大正 No. 6) (大1・178a~b)

〈仏般〉 漢訳：仏般泥洹経 (大正 No. 5) (大1・163a)

〈涅槃〉 漢訳：大般涅槃経 (大正 No. 7) (筏の譬の該当部分¹⁾)

〈雜事〉 漢訳：根本説一切有部毘奈耶雜事卷第三六 (大正 No. 1451) (大14・385b)

〈藏訳雜事〉 右記のチベット訳：hDul ba phran tshegs kyi gshi (Orani Peking ed. Vol. 44, p. 213, 5, 3-5).

〈藥事〉 漢訳：根本説一切有部毘奈耶藥事卷第六 (大正 No. 1448) (大14・131c)

〈藏訳藥事〉 右記のチベット訳：hDul ba gshi: sMan gyi gshi, Orani Peking ed. Vol. 41, p. 130, 5, 7-8.

〈Div〉 The Divyāvadāna, a collection of early Buddhist Legends, ed. by E.B. Cowell and R.A. Neil, Cambridge, 1886, p. 56.

右記〈MPs_s〉の当該箇所とそのチベット訳がサンスクリットと対照して校訂されているが、これは〈藏訳雜事〉の該当部分である。

* このパーリ原典の該当部分が南伝上座部の律藏「Mahāvagga」に引用されているが、「筏の譬」の部分はまだ同文であるので、その箇所のみを指摘してこゝでは触れなう (VI, 230, 3-24)。

二 ゴータマ渡し

パリー語『大パリニッバーナ經』(MPS_P)によると、パターリ村に逗留された仏陀一行は、マガダ国の大臣スニータとヴァッサカラによつて食事に招待された。彼らは阿闍世王の命によつて隣国ヴァッジに対抗するための前衛基地となる城郭を築いていたという。その直後、仏陀一行は城郭を出てガンジス河を渡つたようである。大臣らは仏陀の出て行かれた門を「ゴータマ門 (Gotama-dvāra)」、渡し場を「ゴータマ渡し (Gotama-tīrtha)」と名づけたという。

このことに関しては、諸異本・異訳ともほぼ共通している。〈遊行〉〈般泥〉瞿曇門・瞿曇津。〈仏般〉仏城門・仏溪。〈MPS_S〉ガウタマ門 (Gautama-dvāra)・ガウタマ渡し (Gautama-tīrtha)。〈雑事〉喬答摩門・喬答摩路。〈葉事〉後述の如く、ストーリーの素材が異なるので、記述なし。

ここで、ゴータマ門に関しては問題ないが、「渡し (tīrtha = tīrtha)」の訳語が様々であることは興味深い。(P)tīrtha = (Sk)tīrtha の原意は「河の水際から土手の上までの階段状の通路」のことで、現在の「ガート状になった通路」に当たる。「津」は渡しの水辺を意味するであろうから、それで特に問題はない。「路」については tīrtha にその意味はあるが、ガートの状況を知らない訳者の訳であろうし、また、「溪」については、山岳地帯の谷川のイメージしか出てこないから、漢訳された場所の様子を示していると言えよう。

いずれにせよ、〈般泥〉では、「仏は津渚を渡るに、又追いて之を名づけて瞿曇 (ゴータマ) 津と為す」とあり、また、〈MPS_S〉と〈雑事〉では、この後で仏陀が対岸に渡つた記述の後に、大臣たちがガウタマ (ゴータマ) 門とガウタマ渡しを建造したと明記している。このことから、仏陀の出られた門と渡しは仏滅後に記念として残されていたのであろうが、現在それがどこであるかははっきり比定されていない。^④

城門を出られた仏陀はガンジス河の渡し場に行かれた。そのときの様子を〈MPS₁〉では次のように記述する。

さて、世尊はガンジス河に近づいた。ちょうどそのときガンジス河は渡しと同じところまで水がきて、鳥が飲めるほどに満水していた。

他の異本・異訳では、この部分の川が増水していたことの記述はまったくなく、〈MPS₂〉による限り、仏陀がこの川を渡った時期はおそらく雨期のはしりであったことを示している（この経典によると、この後しばらくして、ヴェーサーリー近くのヴェールヴァ村で雨期の安居に入っている）。〈遊行〉では、「そのとき世尊は巴陵弗（パータリプトラ）城を出て水辺に至る」、〈仏般〉では、「仏が江水に至るとき」とあるのみで、〈般泥〉には渡しに至ることの記述はない。ところが、〈MPS₃〉では、「そこで、世尊は、バラモンでマガダ国の大臣であるヴァルシヤカラの〔ゴータマ門・ゴータマ渡しを造りたいという〕心（citta）を意思（cetasa）で知って、西の門から出て、北の方にガンジス河に向かっていった」という記述があり、〈雑事〉もまったく同一である。先にも触れたように、このような仏陀の行動やその後の記念建造物の造営についての具体的な記述は、これらの仏典がこの場所に王舎城等の他の都と同様の門と道路のある都が建設され、また記念塔などができた後に成立したか、またはつけ加えられたことを示している。〈葉事〉には先と同様にこのような記述はない。

このとき渡しでは、この河を渡ろうとする人々が右往左往していたようである。そのときの様子を〈MPS₄〉では次のように記述する。

ある人々は舟（Hava）を探し、ある人々は筏（Timpā）^⑤を探し、ある人々は桴（Kulla）^⑥を結んで、それぞれ向こう岸に行こうとしていた。

ここで人々は対岸に渡ろうと、舟や筏を借りたり乗せてもらおうと探し求め、また、材料を集めて桴を作ろうとしていたようである。このように、対岸に渡ろうとしていた人々がいたことは諸異本・異訳とも同様であるが、ただ、

渡る手段が諸本によって異なるのは注目される。

〈遊行〉 舟、筏、桴。〈般泥〉 舫舟（もやい舟）、小舟、竹簾、木桴。〈仏般〉 舫舩（もやい舟）、小舫、竹桴。
〈MPS₂〉 シヤルマリーの果実^⑦、瓢箪、綿布団、山羊の革袋。〈雑事〉 草木、瓠（ひょうたん）、浮囊。

ハ)に、〈MPS₂〉や〈雑事〉に舟や筏に類する乗り物でなく、簡単に求められる自然物が出てくるのは、これらの資料が河幅の狭い山岳地域の成立または伝承であることを示唆する。

以上のことから、この大河を、人々は様々な乗り物・道具を使って渡ろうとしていたことがわかる。もし〈MPS₂〉の記述の如く、この河が満水するほどに増水していたとすると、対岸に渡ることは至難の業ということになる。このことが次のような不思議な説話を生み出す要因になったのであろうか。

三 ガンジス河を渡る

仏陀がガンジス河を渡ったときの様子を〈MPS₂〉では次のように記述する。

そのとき世尊は、あたかも力士が (Balava puriso) 曲げた臂を伸ばし、あるいは伸ばした臂を曲げるかのよう
に、比丘衆とともにこちらの岸に没して向こう岸に立った。

この力士の譬は、仏陀がある地点から他の地点に一瞬のうちに移動する不思議な様を表現する定型句であるが、このことは明らかに仏陀が神通力でも使ったとしか思えない記述となっている。周知の如く、この〈MPS₂〉は、他の仏伝とは異なって、仏陀への人格化が極めて少なく、仏陀の行動を比較的リアルに伝えている資料として知られている。この後の悪魔の登場などを別として、尋常でない仏陀の行動はこの箇所のみである。〈遊行〉でも同様に「その時世尊は諸の大衆とともに、譬えば力士が臂を屈伸する頃の如く、忽にして彼岸に至る」と訳される。このことはいったい何を意味するのであろうか。

南伝の〈MPS₁〉だけでなく、北伝の〈遊行〉も同様の記述であるということは、この伝承がかなり古くからあったことを示すものである。ただ、この記述が不思議であつたためか、他の異本・異訳では幾分説明・解釈的になる。〈般泥〉「私は坐して定意し、自ら思う。往昔に未だ作仏せざるの時、身を更め来る所、此の桴船に乗ること復た数うべからず。今、解脱せるを以て復た此に乗らず。」〈仏般〉の記述もほぼこれと同じである。すなわち、私は解脱者であるから今までのように舟を使わずに定意(三昧)によつて渡ろうとしたとの説明である。〈MPS₂〉では、この三昧によつて渡つたことをもつと具体的に記述する。

そのとき世尊は次のように考えた。「ガンジス河に触れずに流れを渡つて行こうか、それともこちらの岸に没して、向こう岸にしっかりと立とうか」と。そこで世尊はそれに応じた三昧に入つて、心が集中安定するや、こちらの岸に没して、向こう岸にしっかりと立った。

ここでは、〈MPS₂〉の記述を踏まえて、それが三昧によるものであると説明するのである。〈雜事〉の原典はおそらく〈MPS₃〉の記述に近かつたと思われ、その訳はさらに具体的になる。

世尊は見已りて是の如き念を作す。「我今当中流の水上を安歩して去るとやせん、神力を以て此岸より没して彼岸に出ずるとやせん」と。即ち勝定に入りて其が所念に随ひ、諸苾芻と共に此に没して彼に出る。

すなわち、漢訳者は仏陀が此岸に没して、いきなり対岸に立つという神通力で対岸に渡つたとするのである。

ところで、先にも触れたように、〈薬事〉では、筏の譬の偈の部分にのみ、まったく同一ではないにしても諸本と共通部分があるが、前後のストーリーは明らかに他の素材に基づいたものである。その記述を要約すると次のようになる。

仏陀がガンジス河を渡る頃、マガダ国の未生怨(阿闍世)王と広嚴城(ヴァイシヤリ)の栗姑毗種族(リツチャヴィ族)はそれぞれ浮き橋を作つて渡つていた。その時諸龍(ナーガ)は福業を修するため、それぞれ連なつて水上に

頭を出して世尊に渡ってもらおうとした。そこで、仏弟子たちは浮き橋を渡ったのに、仏陀と阿難はその龍の橋を渡り、ガンジス河を渡りおえた。

このように〈葉事〉では、仏陀の渡り方の不思議さを神秘的な龍の橋を渡るということの説明し、筏の譬に繋ぐのである。仏陀がガンジス河を舟も使わずに即時に渡ったというこの謎は、諸本の筏の譬の偈に関する諸伝承にもそのまま現れている。次にそれらの比較検討を試みよう。

四 筏の譬の諸相

この筏の譬は、ほぼ各資料とも韻文として伝えられている（〈仏般〉は韻文かどうか確定できない）。ところが、この譬を説いた者が各資料によって異なっているのは興味深い。

〈MPS_P〉では、人々が筏などを求めて右往左往している様を見て、「そこで世尊はこの意味を知って、その時点でこの感興の詞（*udāna*）を思わず発した」と、仏陀が説いたことになっている。〈遊行〉〈般泥〉も「自ら頌を説く」、〈仏般〉でも「自ら念じて曰く」とあるから、同様に仏陀が説いたことになる。ところが、〈MPS_S〉では、「さてある比丘がその時点で偈（*gāthā*）を唱えた」とあり、また〈雜事〉でも、「苾芻（比丘）あり、即ち是時に於いて伽陀（*gāthā*）を説いて曰く」と、両資料ともある比丘が説いたことになっている。また、〈葉事〉では、「爾の時、一近事男（*upāsaka* || 優婆塞）ありて頌を説いて曰く」と、仏陀でも比丘でもないある在家信者が説いたことになっており、これらのことも大きな謎である。

次にその「筏の譬」の韻文について、比較対照を容易にするため、各資料の原文とその拙訳を挙げてみよう。

① 〈MPS_P〉

ye taranti anīvanam sarani setum

— 低湿地を避けて浮橋を作り、

katvāna visajja pallāni.

大河や流れを渡る人々がいる。

kullam hi jano pabandhati.

人は桴を縛っているのに、

tiṅṅa medhāvino jānā ti.

聡明な人々は渡ってしまった。

このパーリ原典の偈は、直前の散文の記述を承けた形になっており、わかりやすい。しかも対岸に渡ったことの不思議さを、浮橋で容易に渡ったと説明しているかのような印象を与える。雨期のインドでは、延々と広大な湿地帯が拡がり、それがガンジス河との境界もわからなくなり、広大な湖のようになる。そのような広い湿地帯を避けて、対岸との比較的近いところに設けられた浮き橋の上を渡ったとの解釈もされうる。

② 〈遊行〉

仏為海船師 法橋渡河津

仏陀は海の船師であり、法橋は河津を渡す。

大乘道之輿 一切渡天人

大乘道の輿は一切、天と人を渡す。

亦為自解結 渡岸得昇仙

また自らの為に結縛を解いて、彼岸に渡り昇仙を得る。

都使諸弟子 縛解得涅槃

すべて諸弟子に結縛が解け涅槃が得られるようにしよう。

③ 〈般泥〉

仏為海船師 法橋渡河津

仏陀は海の船師であり、法橋は河津を渡す。

大乘道之典 一切渡天人

大乘道の教え(典)は一切、天と人を渡す。

亦為自解脫 渡岸得昇仙

また自らの為に解脫して、彼岸に渡り昇仙を得る。

都使諸弟子 縛解得泥洹

すべて諸弟子に結縛が解け涅槃が得られるようにしよう。

以上の〈遊行〉と〈般泥〉の偈の内容(あるいはその訳の依拠した原典)はほぼ同一と見てよい。ただ、河を渡る

い)と以外は〈MPS_P〉のそれとはまったく内容が異なっていて、筏の言葉もない。しかも、「大乘道」という語が見

えたり、涅槃の記述さえある。もともとの原典では同じであったはずの筏の譬がなぜこのように変わっていったのか、実に不思議である。ふつう〈遊行〉と〈MPS_P〉とは内容的に一致することが多いのに、ここではむしろ〈般泥〉と一致するというのはどういうことであろうか。この点については、後に検討したい。

④ 〈仏般〉

我是度人師

我はこれ人を度す師である。「だから」

使人得度世道

人に世道を渡させることはあつても、

不復従人受度

人に渡してもらうことはない。

〈MPS_P〉の異訳である〈仏般〉は〈般泥〉と内容的によく似ていることが指摘されている。しかし、ことこの筏の譬に関してはまったく異なっている。ただ、〈仏般〉ではこの前に「我が未だ仏と作らざる時、此の曹水を度るに、桴船に乗りて度れり。今我が身は復た桴船に乘らずして水を度る」と、仏陀が舟に乗って渡ったのではないという弁解の言葉があり、この部分はその理由となっているから、〈般泥〉の偈は〈仏般〉に基づいて形成されたとの見方もできる。これら二經の成立年代の先後について学界で論議があるが（後註⑬参照）、この点については興味深いところである。

⑤ 〈MPS_S〉

-1)

ye taranti hy āṇavaṃ sarāḥ,

低湿地を避けて浮橋を作り、

setum kṛtvā visṛjya pātvalāni.

大河や川を渡る人々がいる。

kolaṃ hi jānāḥ prabhadnate,

人々は桴を縛っているのに、

tīrṇā mebhāvino jānāḥ.

聡明な人々は渡ってしまった。

-2)

utūṛṇo bhagavān buddho,
brāhmaṇas tiṣṭhati sthale.
bhikṣavaḥ pariśāyanti,
kolam badhanti śṛavakāḥ.

世尊・仏陀はすでに渡りおわり、
バラモンは陸に立っている。
比丘たちは沐浴しており、
声聞たちは桴を結んでいる。

-3)

kiṃ kuryād udapāneṇa,
āpaś cet sarvato yadi.
chittveha mūlam tiṣṇāvāḥ,
kasya paryeṣaṇām careḥ.

もし至る所に水があるならば、
泉に何の用があろうか。
ここに諸の渴愛があってもその根を断じてしまったのに、
いままら何を探求しようとするのか。

(梵文の校訂者による欠落部分の補遺にそのまま従う)

この梵文原典の偈はまた不思議である。⑤₁₋₂の部分は明らかに①〈MPS₁〉の偈と内容的に同一であり、原語的にもパーリとサンスクリットはほぼ対応している。しかし、⑤₂₋₃、①₃の部分は、世尊・仏、バラモン、比丘、声聞それぞれに河の渡り方の段階があるかのようにも読め、異訳〈遊行〉〈般泥〉〈仏般〉にはその記述はない。ことに①₃の部分は筏の譬とどういう関係になるのか実に不可解である。ガンジス河に水が満水しておれば、井戸を求めれば必要がないと同様に、渴愛の根を断じてしまったのだから、今更何も探求する必要がないと言っている。水に浸かって泳いだり、桴を用意する必要がないと言っているのであろうか。ところが、次の漢訳〈雜事〉・〈藥事〉は一致する部分があるようである。

⑥ 〈雑事〉

-1)

諸人求渡者 往来非一数

諸人で渡ることを求める者は
往来すること一數ではない。

浮囊及草木 欲越號伽津

浮や囊（革袋）そして草木で
ガンジス河を越えようとしている。

-2)

世尊以神力 并及於僧衆

世尊は神通力をつかって
それを僧衆にも及ぼし、

從此至彼岸 不復起疲労

こちらの岸よりあちらの岸に至っても
まったく疲労を起こさなかった。

-3)

平川水流溢 穿井復何為

平川の水の流れが溢れているのに
何のために井戸を穿つ必要があるのか。

心根煩惱除 豈更求余物

心の根から煩惱を除いてしまったのに、
どうしていまさらほかの物を求めようとするのか。

⑦ 〈業事〉

-1)

智人渡大海 乘舡不作橋

智慧ある人は大海を渡るのに

愚者海為橋 江河乘大船

船に乗って橋を作ることはいらない。
愚者は海に橋を作り
江河では大きな船舶に乗る

-2)

世尊已渡河 婆羅門処岸

世尊はすでに河を渡ってしまい、
婆羅門は岸にいる。

声聞乗杙去 苾芻但洗身

声聞は筏に乗って去ったのに
比丘はただ身体を洗って（沐浴して）いる。

-3)

触処水平流 何煩別求井

触れるところには水が平流しているのに
どうして別に井戸を求めることに煩うのか。

断除貪愛本 更当何所求

貪愛の根本を断除したのだから
更に何を求める必要があるうか。

この箇所は、⑥漢文〈雑事〉とは①②以外の部分は合わず、むしろ、〈MPS〉の方と対応する。ところで、漢訳の〈薬事〉と〈雑事〉とは偈の内容に幾分相違があるが、〈蔵訳薬事〉は〈蔵訳雑事〉とまったく同文である。ところで、〈蔵訳雑事〉のチベット文を見ることにしよう。

⑧〈蔵訳雑事〉

-1)

kha cig zam pa bisugs nas

— ある人は橋を架けて、

chu bran por te rgya mtso rgal/

skye bo nmams ni bzins hchah

m khas pahi skye bo ramms su rgal/

-2)

sans rgyas boom ldan bram ze

rgal bar gyur nas skom la bshugs/

dge slon dag hdir khru byed

ñan thos nmams ni gzins hchaho/

-3)

gal te kun na chu yod pa/

khron pahi chus ni ci shig bya/

srid pahi rtsa ba bcaod nas ni/

su shig sbyod pa tshol par byed/

低湿地を捨てて大河を渡る。¹⁷⁾

人々は筏を用意しているのに、

賢い人たちはすでに渡り終わった。

仏陀・世尊、バラモンは

渡ってしまい、陸に立っている。

比丘たちはここで沐浴して、

声聞たちは筏を組んでいる。

もし至る所に水があるならば、

井戸の水で何をしようとするのか。

輪廻の根を切ったからには、

誰が行を求めようとするのか。

⑥-1)の部分は表現は異なるが内容的には①や⑤-1)に対応する。⑦-1)は賢者は海では船に乗り、愚者は橋を架けると、他の異本とはまったく異なった内容である。⑥-2)は⑤-2)及び⑧-2)と一致する。また、⑥にはない⑤-1)の対応部分が⑦-2)にある。このように、⑤〈MPSs〉⑥〈雑事〉⑦〈薬事〉のそれぞれの偈の対応関係が三者相互に関連しあっているのは一体何を意味しているのであるか。また、〈MPSs〉⑤-3)の部分の意味の前後との不可解さどのように理解したらよいであろうか。以下、他の偈とも比較しつつ検討してみよう。

ここで、根本説一切有部毘奈耶と共通点が多く、北伝の讚仏文学の代表的なサンスクリット・テキストである

『Divyāvadāna』〈Div〉の中に、ここに出る⑦〈薬事〉の偈の前のストーリー（龍橋についての偈で、前に紹介済み）とまったく同一のストーリーがあり、偈の部分は漢訳〈薬事〉とは異なる（〈蔵訳薬事〉とは合う）が⑤〈MPSs〉のそれとまったく同一という不思議な部分がある。

⑧ 〈Div〉 （〈MPSs〉と注記の点が異なるのみで、意味はほとんど同じと見てよいので翻訳は省略。）

-1)

ye taranty arṇavam* saraḥ,

* -nti hy arṇa-

setuṃ kṛtvā visṛjya palālāni**

** palvalāni

kolaṃ hi janāḥ prabandhitā***

*** prabandhate,

uttīrṇā mebhāvino janāḥ.

-2)

uttīrṇo bhagavān buddho,

brāhmaṇas tiṣṭhati sthale.

bhikṣavo 'tra pariśnānti****,

**** bhikṣavaḥ pariśnāyanti,

kolaṃ badhnanti śrāvakāḥ.

-3)

kiṃ kuryād udapānena,

āpaś cet sarvato yadi.

chittiveha mūlaṃ tṛṣṇāyāḥ,

kaśya paryeṣaṇāṃ cared iti.

以上、〈MPS_P〉の諸異訳及び〈薬事〉〈Div〉における「筏の譬」に関連する部分の比較と問題点の指摘を行ったが、次にこのような多様性をもたらした伝承の意味と、その背景について考察してみよう。

五 筏の譬の背景

前項における諸異本・異訳における伝承についての比較検討の結果をまとめるとおよそ次のようになる。

(1) パーリ本の原典①〈MPS_P〉は、仏陀と仏弟子がガンジス河の対岸に一瞬にして渡ったことの不思議さを偈にまとめているのに対して、その諸漢訳②③④は内容はまったく異なり、不思議さの説明か、対岸に渡ることを涅槃に象徴させようとしている。ただ、その偈は仏陀自身が説かれたことになっていることだけが共通である。

(2) サンスクリット本⑤〈MPS_S〉と⑧〈蔵訳雑事〉〈蔵訳薬事〉及び⑨〈Div〉とは内容的に同一で、第一偈がパーリ本①〈MPS_P〉と一致し、第二偈は仏陀(バラモン)・比丘・声聞の様、第三偈は水が満ちておれば井戸が不要なように、渴愛を断じたものにさらに探求することの不要さを説いているが、第一偈と第三偈の内容的關係が不可解である。

(3) 右に指摘したように、⑧〈蔵訳雑事〉と〈蔵訳薬事〉の偈は同一であるのに、漢訳⑥〈雑事〉は第3偈のみが⑤⑧⑨と一致し、第一偈では人々が種々の方法で河を渡ろうと努力している様、第二偈では仏陀が神通力で対岸に渡った様を描写する。ところが⑦〈薬事〉では、第二・三偈のみが⑤⑧⑨と一致し、第一偈では、智者は海を船で渡り、河を橋で渡って、海に橋を架けたり、小川を船舶で渡ることほしないと表現している。

なお、⑤〈MPS_S〉と⑥〈雑事〉⑧〈蔵訳雑事〉とは比丘が説いたことになっているのに対して、⑦〈薬事〉〈蔵訳薬事〉および⑨〈Div〉は一優婆塞が言ったことになっている。

ここで、もう一度この偈の説かれる前の長行(散文表現)に返ってみよう。〈MPS_P〉と〈遊行〉では一瞬に対岸

に渡った不思議さをそのまま描写しているのに、〈般泥〉と〈仏般〉は、以前は舟に乗ったが今は三昧によって乗らずに渡ったと、弁解説明的な描写であつた。そして、④〈仏般〉ではその弁解をそのまま偈にまとめている。ところが、②〈遊行〉と③〈般泥〉では、大乘の道（輿）は天・人を渡し涅槃を得しめるというまったく異なった偈となっている。このことは、おそらく、ガンジス河を渡る〓到彼岸〓涅槃という考え方が根底にあり、そのような大乘的思潮が影響を与えているのであろう。そうすると、〈仏般〉が古く、後に大乘の影響により〈般泥〉の偈が作られ、それが四世紀末から五世紀初頭にかけての仏陀耶舎らの訳出した〈遊行〉にそのまま採用されたと見てよいであらう。¹⁵⁾

このような「到彼岸〓涅槃」という考え方は、〈MPS_a〉の註釈である〈SV₁〉に「深くて広い渴愛の流れを渡る者たちは聖道と称された橋を作るのである」とあり、またその複註〈SV₂〉に「筏がなくてもは、そのような水はそのような筏がまったくなくても、智慧ある人々はすでに渡ってしまったのである。しかるに、貪欲の流れをいわゆる聖道が止滅させて追いつくという意味である」というところにも見えている。

少なくとも諸本に見る限り、このような漢訳の偈にあるような内容の原文があつたとは考えられない。おそらく、これから検討するような北伝の伝承による何らかの偈があり、原本に伝えられる仏陀の不思議な行動に、漢訳者たちはその説明のための弁解的な記述を入れ、そして、河を渡るという点からそこに涅槃に到ることを考え、上記のような偈ができあがつたのであろう。

次に、梵本や根本有部律の諸本あるいは『ディヴァーヴァダーナ』の偈について検討してみよう。仏教徒にとつて永久に忘れることのできない釈尊の大概涅槃を伝える経典は広く流布したことであらう。それが南伝仏教ではパーリ語による“Mahāparinibbānasuttanta”として伝えられ、北伝仏教ではプラークリットあるいはサンスクリットの“Mahāparinirvāṇasūtra”として伝承されたであらう。このことは南伝大藏経中の長部にパーリ原典が存在し、また、漢訳『長阿含』の中の「遊行経」を始めとする諸異訳、あるいはトルファンから出土したこの経典の複数の梵本の断

片などから確認される¹⁴⁾。しかも、この經典は南方上座部の『ヴィナヤ』や北伝の根本説一切有部の律典である〈雜事〉等にも引用されて、更に広く、年代的にも後代にまで傳承されることになった。

これらの資料の中で、前にも触れたように、梵本〈MPS_s〉〈雜事〉〈藏訳雜事〉と〈葉事〉〈藏訳葉事〉〈Div〉とは明らかにストーリーが異なっている。すなわち、前者では、仏陀が水上を歩こうか神通力で渡ろうかと考えて、三昧に入つて対岸に立つたところ、一比丘が偈を唱えたときとされ、後者では、諸弟子は阿闍世王とリツチャヴィ族の作った浮橋によつて対岸に渡つたのに、仏陀と阿難はナーガたちの連ねた橋を渡つたところ、一優婆塞が偈を唱えたときとされている。

ところが、偈の方を見ると、先の(2)で触れたように、梵本、〈藏訳雜事〉〈藏訳葉事〉〈Div〉が内容的に一致して定型化しているのに、〈葉事〉は第一・三偈のみが一致し、〈雜事〉は第三偈のみしか一致しないという不思議な結果となった。同一の素材になるテキストであっても、漢訳とチベット訳で内容が異なり、両チベット訳は梵本の方に一致するのである。しかも、この定型化した梵本等の偈の内容は、次のように解釈に困難がある。

すなわち、第一偈では、橋や筏で河を渡る人もあるが、仏陀はすでに渡つてしまつた。第二偈では、仏陀は渡つてしまい、バラモンが陸に立つており、比丘や声聞は泳いだり筏を組んだりしている。第三偈では、水が満ちておれば井戸に用がないと同様に、煩惱を断つたのだから更に何を求めようというものである。どうも第一偈と第三偈の対応がわかりにくいのである。

そこで、梵巴の資料である①〈MPS_p〉と⑤〈MPS_s〉⑨〈Div〉の偈のミッターを調べてみよう。まず、⑤⑨にのみある第二、第三偈は Sloka である¹⁵⁾。ところが、①の偈とそれに対応する⑤⑨の第一偈の原型はかなり古い詩形であつたらしく、問題点がある。原語的にはバリーと対応する第一偈は cadence の形から、幾分問題は残るにせよ、a c パーダは Vaitāleya であり、b パーダは Aupacchandāsaka であると考えられる。そうすると、古くから①⑤⑨

の原型となるような形の偈があつて、Slokaの形を取る第二、第三偈が後で付加されたと見ることが出来る。そのことから、内容的にも見られる第一偈と第三偈の不連続性が説明されることになる。それでは、どうしてこれらの偈が付加され、また、漢訳の⑥〈雑事〉における第一・二偈及び⑦〈葉事〉における第一偈と梵本等における偈の相違はどのように説明したらよいであろうか。

この難問を解く鍵は、実はこの漢訳二本の偈にあると筆者は考える。そこでもう一度⑥〈雑事〉⑦〈葉事〉の第一・二偈の内容と第三偈との関連を検討してみよう。前者の一・二偈では、仏陀が弟子たちとともに一瞬のうちに対岸に渡つたのを一比丘が見て、《多くの者が浮き袋などでガンジスを渡ろうとしているのに、仏陀は神通力で簡単に渡つた》と唱えたとされる。ここでは、やはり第三偈と内容的につながりにくい点は否めない。これに対して、後者では、比丘たちが浮橋を渡つたのに、仏陀はナーガの連なつた橋を渡つたのを一優婆塞が見て、《智者は大海を橋でなく大船で渡るのに、愚者は大海に橋を作り、河では大船に乗る。そこで、「智者である」仏陀は「龍橋で」河を渡つたのに、バラモンは陸に留まり、声聞は筏で去り、比丘は沐浴している（泳いで渡るの意味か？）》と唱えたのである。そうすると、《このように手の》触れるところまで「満水して」水が流れているのに井戸を求める必要がないように、貪愛の本を断除した者（智者〓仏陀）にさらにいかなるもの（筏などの手段）を求める必要があるか》という第三偈に内容的につながつてくるのである。

ここで、この第二偈と対応する梵本⑤〈MPS〉の偈における「バラモン (brāhmana)」を中村元博士は「仏陀」のことに解釈しているが、この〈葉事〉に限れば、仏陀以外のバラモンとの解釈も可能となる。ただ、後に検討する別のパリーの資料からしても、仏陀のことを意味すると理解し、「バラモンが陸の上に立つ〔如く〕」と読んだ方がよいようである。そうすると、この第二偈は、仏陀（バラモン）〓対岸に渡つて陸に立つ、声聞〓筏で渡る、比丘〓泳いで渡る、という彼岸（〓涅槃）に渡る段階を示しているとみることができよう。

以上のような検討を踏まえて、我々はこの「筏の譬」の種々相成立の背景についておおよそ次のように考えることができる。

仏陀が最後の旅において、ガンジス河を渡ったことは事実であろう。入滅に近いこのときに、仏陀が河を渡ろうとする人々を見てある言葉をつぶやいた（ウダーナ）かもしれない。その言葉が仏弟子に記憶され、仏陀最後の旅路を伝える經典として、当時の言語古マカダ語などで伝承され、さらに伝承の地域の俗語（ブラークリット）に変換されていったであろう。この伝承の段階で韻文はミーターの關係で少しづつ変わっていく。この筏の譬の偈はかなり理解しにくい偈になっていたかも知れない。諸漢訳はこのような段階の原典が翻訳されたのであろう。そしてパーリ語化・サンスクリット語化される段階で、一応ミーターを踏んだ①〈MPS₂〉や⑤-1)〈MPS₃〉のような偈となった。この偈の解釈の困難さは近年の学者も指摘するところである¹⁸⁾。

これとは別に、仏陀がガンジス河を渡ることに関して、龍橋を渡る〈葉事〉のような説話が伝承されていたのであろう。律藏が編集される段階で、そこに仏陀の最後の旅を伝えるこの經典が引用されることになった。南伝 *Malavagga* では、この經典の要約を含む引用となっており、北伝〈雜事〉では全文引用となっている。この引用の段階で、当初からあった①または⑤-1)の偈に⑦-2)-3)の偈が付加されて、現在の⑤〈MPS₂〉⑧〈藏訳雜事〉〈藏訳葉事〉⑨〈Div〉に見られるような定型的な偈が成立したのであろう。そうすると、⑥〈雜事〉の偈の原典はその過渡的な段階にあったことになる。

この仏陀の不思議な河の渡り方は、後の仏伝文学においても伝承されていく。『ラリタヴィスタラ』や『マハーヴァアストウ』あるいはその対応諸漢訳、『ジャータカ』などで、成道後の仏陀が初転法輪のためベナレスのガンジス河を渡るとき、船頭に渡し賃を要求されたため、仏陀は神通力で対岸に渡ったとの説話はあまりにも有名である¹⁹⁾。

それでは、筏の譬の偈に何故このような付加がなされたのであろうか。それはおそらく、先にも触れたように、仏

教思想の大乗的發展につれて、河を渡るに到彼岸に涅槃という考え方が定着し、その涅槃を説くために仏陀がいつも説いていたと思われる「彼岸の教え」や「毒蛇喩」あるいは「船筏喩」という説法が影響を与えたと思われる。

『ダンマパダ』八五、八六偈では次のように説く。

人々は多いが、彼岸に達する人々は少ない。

他の人々はこちらの岸でさまよっている。

法が正しく説かれたときに法に従う人は

渡りがたい死の領域を「越えて」彼岸に到るのであらう。(Dhp. PTS, 1994, 24)

「死の領域 (macchudheyra) を越えた」とは涅槃のことであるから、彼岸は涅槃のことを意味する(ブツダゴ―サの註釈もこれを支持する)。

『相應部』三五―一九七経では、ある人が毒蛇や殺人者を恐れて逃げていると、大河に出くわす。

さてそのとき、比丘らよ、この男に次のような考えがおきた。「これは大へんな大河である。此岸 (orimantira) は危惧があり、恐怖がある。彼岸 (parimantira) は安隠で、恐怖がない。ところが、渡す舟も往來するための渡橋もない。そうだから私は、草、木、枝葉を寄せ集めて、筏を組み、その筏によって手と足で努力しつつ安全に対岸 (para) に渡ったらどうだろうか」と。そこで比丘らよ、この男は草、木、枝葉を(中略)安全に対岸に行った。

バラモンが彼岸に渡ってしまい、陸に立つ「ように」。(S. IV, 174)

このあと、仏陀がその譬の説明をする。すなわち、大河とは瀑流(煩惱)、此岸は有身見、彼岸は涅槃、筏は八正道、手足は精進、バラモンは阿羅漢の譬であると。このパ―リには二種類の漢訳が伝えられており、ほぼ同内容となっているが、その内の『雜阿含』四三一九では、バラモンを如來の譬としている(大二・三二三c、大二・六六九c參照)。しかし、ある男が大河を渡る話に、いきなり「バラモン」が出てくるのは奇妙である。この前後に譬の説明以

外でバラモンは一度も登場しないのである。

ところで、引用文中の右線部分の原文は次のようになっている。

“*tiṅṅo paṅṅato thale tithathi brāhmaṇo*” (S. IV, 174, 19)

これを先の梵本⑤-2)の a b 偈と対比すると驚くほどの一致を見る。

“*uttīno bhagavān buddho, brāhmaṇas tiṣṭhathi sṭhale.*”

このことから、パーリのこの部分はおそらく現存しないある定型句からの引用であると思われる。そうすると、彼岸 || 涅槃を示す定型句または偈が古くからあって（それが⑦（薬事）のような偈であったかも知れない）、仏陀最後の旅の筏の譬の部分の第二偈（⑤⑦⑧⑨-2)）やこのパーリなどに引用あるいは付加されたのではなからうか。そうすると⑤-2) 二行目の訳は「バラモンが陸に立っている〔如く〕」、⑦-2) は「婆羅門が岸にいる〔如く〕」と訳すべきか。

第三偈についても同様の説明が可能となる。すなわち、仏陀が河を渡ることの譬である「船筏喩」はかなり有名な譬であり、仏教の歴史において相当流布したようである。ここでは、仏陀が諸比丘に対して度脱と無執著を教示するのに、法に対しても執著すべきでないこと、法もまた捨てるべきことを船筏の譬をもって説いているのである。²⁰⁾

この譬はずいぶん古くからあったようで、その原型とも見られるのは次の『スッタニパータ』第二一偈であろう。

師は答えた。

我が筏はすでに組まれて、うまく作られているが、激流を克服して、すでに渡りおわり彼岸に到達しているの、もはや筏の必要はない。だから、神よ、もしも雨を降らそうと望むなら、雨を降らせよ。(Sn. 21)

すなわち、先の毒蛇の譬では、筏は彼岸に渡るためのもので、八正道にさえ譬えられたのに、ここでは筏は必要がないと説かれるのである。このことが『中部』二二「蛇喩経」に詳しく説かれる。紙幅の都合で原典の検討は省くが、

この經典では、先の『相応部』の毒蛇の譬と同内容の記述の後に、次のような記述が加わる。

渡りおわって彼岸に達した彼に次の考えが起きたとしよう。「この筏は私にとつて益するところが多かった。私はこの筏によつて手と足で努力しつつ安全に対岸に渡った。さあ、私はこの筏を頭に載せるか肩に担ぐかして、思い通りに行こう」と。比丘らよ、そのことをどう思うか。かの人はこのようにしてその筏に対してなすべきことをしたであろうか。(M. I. 135)。

このあと、比丘らは「そうではありません、世尊よ」と答え、仏陀は比丘らに対して、筏を放置して行くことが筏に対してなすべきことをしたことになるかと答える。そして、「比丘らよ、筏喻を理解することによつて、法さえも捨てるべきであり、況や、非法はもちろんである」と説く。すなわち、ここでは、すでに渡りおえたならば、筏は不要であり、固執するためのものではないことの譬えに変わっていくのである。そして、この船筏喻は、漢訳『阿梨吒經』などにも繰り返し説かれ、さらに、『金剛般若経』などの大乘經典にも引用されるようになる。^②

サンスクリット本⑤〈MPS_s〉と⑧〈蔵訳雑事〉〈蔵訳薬事〉及び⑨〈D.V.〉の第二偈と第三偈とはこのような船筏喻という比喩の説法の流れの上に理解することができる。そうすると、第三偈は水が満ちておれば井戸が要らないと同様に、彼岸に至り煩惱を断じて涅槃を得たのであるから、渡るための筏は不要であり、さらに何を求めようというのか、というように解釈することができる。

以上の検討から、我々は、仏陀最後の旅路を伝える諸資料における筏の譬の種々相の形成過程をおおよそ次のように理解することができる。

おそらく当初は筏の譬の元となる偈のみが伝えられていたのであろう。そのルーツは仏陀が思わず発した感興の詞(ウダーナ || udāna) を元にしたものであったに違いない。それは解釈の困難な偈であり、伝承の段階で①〈MPS_p〉や⑤①)〈MPS_s〉のような偈として定着した。漢訳の異訳三本(②③④)の偈は、定着前の偈をもつ原典が翻訳され、

それぞれ意識もしくは思想的に拡大解釈されたものと思われる。

これとは別に《船筏喻》というような説法が定型の偈として流布していたのであろう。それは⑦〈薬事〉のような偈であつたらう。それが河を渡る涅槃というところで結びつき、⑤〈MPS〉と⑧〈蔵訳雑事〉〈蔵訳薬事〉及び⑨〈Dir〉のような偈として定着した。これらを結びつけたものは、伝承の段階での大乘の思潮の影響であろう。三つの偈として定着する過渡期の状況を示すのが⑥〈雑事〉として漢訳された原典の形であつたらう。

河を渡るということは、心理学的見地からしても、その人の人生における重要な転機を示すといわれる。このガンジス河を渡るということは仏陀にとつても、また、その旅路を伝える後世の仏教徒にとつても大きな意味をもつていたにちがいない。現にこの『大パリニツバーナ経』においても、河を渡る前は、七不退法、善悪の教え、あるいはパータリ村における神々を讃える教えなど現実的、世俗的内容であつたのに、河を渡つてからは、老病死を踏まえ、涅槃とは何かという宗教的な内容に変わつてゐる。そして、仏陀は、仏弟子や信者たちに、人間たるものが死ぬことは不思議なことではないと淡々と説きつつ、ご自分の死を大般涅槃として演出され、涅槃という人生の目標をはつきりと示してくださいましたのである。このような筏の譬の種々相は、この箇所がそういう重要な箇所であることを示す証になるのである。

(本稿は、平成九年度文部省科学研究費〈基盤研究CⅡ研究代表者田宮仁〉による研究成果の一部である)

註

- ① 大谷大学佐々木研究室編『仏陀の国を行く』大谷大学佐々木研究室・一九八一年。筆者はこれの中で、「仏陀の故郷——ルンビニーとカピラワットゥ——」(七—二〇頁)を担当し、ここで仏陀最後の旅の目的は故郷を指そうとしたのではないかとう提言をした。この点について、すでにA. Foucherがその著で指摘していることを後で知った(A. Foucher, *La Vie du Bouddha*, Paris, 1949, p. 296)。

② 仏陀最後の旅とカピラ城踏査団編『仏教の原点を訪ねて』文栄堂・一九八三年。

③ このときの写真が拙著『人間仏陀——その足跡と思想——』（文栄堂・一九九一年）二〇五頁の写真である。

④ 現在パトナのガンジス河岸に「ブツダ・ガート」という名のガートがあるが、ここがゴータマ渡しであると確定したわけはない。

⑤ 註釈〈Sv〉及び複註〈Sv.1〉によると、筏とは木の板と板を楔で打ちつけて、舟のようにしたものである。

⑥ 註釈〈Sv〉及び複註〈Sv.1〉によると、桴とは、竹や葦などを蔓草などで束にしたものを結んだものである。

⑦ 広くインド東南アジアに産する高木で、学名「Bombax heptaphylla」、和名「ワタノキ」。赤い花を付け、幹には刺がある。その種子の間に綿状の毛があり、詰め物に使うとされる（和久博隆『仏教植物辞典』国書刊行会・一九八二年、六一頁参照）。

⑧ 龍口明生「balava puriso」を含む定型句の検討」パーリ学仏教文化学第七号、五七頁参照。

⑨ 〈Sv〉「低湿地を避けて」とは、水で一杯になった低地を通らないで。〈Sv.1〉低湿地は彼らにとつて渡るべきところではないから。

⑩ 〈Sv〉「大河〔amāvaya〕」とは、一エーリヤナほどもある深い広大な水のある場所と同義語である。〈Sv.1〉大海〔samudda〕そのものではない。

amāvaya には「海」「大海」という意味があり、中村元博士等による諸訳ではそのように訳しているが、仏陀当時には広大な水はガンジス以外には考えられなかった。そのガンジスの水を意味するこの語を後に「海」と理解するようになったのである。したがってここでは「大河」と訳した。註釈・複註はこのようなことを説明しているようである。

⑪ 〈Sv〉「流れ〔sara〕」とは川〔nadi〕のことである。

⑫ 〔Sv.1〕Sv句にある chu brah は「小河」、rya miso は「大海」の意味であるが、このままでは理解しにくい。この部分は〈MPS〉とほぼ対応する箇所でもあり、ここはガンジス河を渡る場所であるので、前註⑨⑩と同じ理由により、「低湿地を捨てて大河を渡る」と訳した。おそらくチベット訳者は、雨期のガンジス河の状況が理解できていなかったためであろう。

⑬ 実は、〈般泥〉と〈仏般〉とは、訳者及び訳出年代に学界で異論がある。従来、失訳である〈般泥〉は支謙訳（三世紀前半）で、一番古い漢訳あり、これを参照して、三世紀末頃に白法祖が〈仏般〉を訳したとする説が有力であった。しかし、その後、

けるダルマ文献の影響——出家者の渡河料に関して——」印度学仏教学会第四八回学術大会、一九九七年六月二三日、於大谷大学。

⑳ 田辺和子『パリ聖典に見られる物語文学の世界』（山喜房・一九九七年）二六九―二七一頁参照。

㉑ 細田典明『『阿梨吒経』考——蛇と筏の比喻——』今西順吉教授還暦記念論集『インド思想と仏教文化』（春秋社・一九九六年）一九六頁参照。

※ 梵巴の偈におけるミーターの検討については、本学大学院博士後期課程舟橋智哉氏、律藏チベット訳の検索については、同奥村浩基氏の協力を得た。

追記

本稿校正の段階で、アンドレ・バロウ及びワルト・シュミットの両博士が、左記の論著で仏陀の最後の旅におけるガンジス渡河と筏の譬の偈について詳しく論究していることを知った。それぞれ有益な論攷であり、本稿に参照すべき所もあるが、今の段階での書き入れは不可能であるので、別の機会に触れることにしたい。

André Bareau, *Recherches sur la Bibliographie ou Buddha dans les Sūtrapiṭaka Anciens*: II. Les Derniers Moins, le Parinirvāna et les Funerailles Tome I, Paris: Ecole Française d'Extrême-Orient, 1970, pp. 72-77.

Ernst Waldschmidt, *Die Ueberlieferung vom Lebensende des Buddha*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1948, pp. 63-64, 338-339.